望氣

かじを切るべきとき

「生物の多様性」とは要するに「生物たち」のダイバーシティーとて大丈夫か。実際は断崖に立たされている気分である。「持続的な成長」の一点張り、いや二点張りだ。だが、それではたし

を増してきた。それでも国際社会は、依然として「生物の多様性」と

地球の温暖化がもう待ったなし、深刻な気候変動も年々激しさ

各方面からは、あれで良かったかの掛け声があがっている。

英国のグラスゴーで、COP26の国際会議が終わった。け

れども

間ファーストの観念が居座っていた。いうことで、その考え方の中心にはいつも「ヒト」が座っていた。人「生物の多様性」とは要するに「生物たち」のダイバーシティーと

そこには大地や大気、海や河川、岩石や砂丘などの「自然」は含まれていなかった。無機的な物質界は勘定に入れられていなかった。無機的な物質界は勘定に入れられていなかった。 ところが今日、世界の至る所で山は崩壊し、森林は燃えたり伐採なった。そんなことでわれわれの暮らしは大丈夫なのか。漁業や林なった。そんなことでわれわれの暮らしは大丈夫なのか。漁業や林なった。そんなことでわれわれの暮らしは大丈夫なのか。漁業や林なった。それできるのか。生き物たちを獲って食べて、生き続けていくことができるのか。それでもなお「持続的な成長」などとノンキなことができるのか。

ばならないと思っているのである。 このままいけば地球そのものが開発され尽くされ、破壊されるこのままいけば地球そのものが開発され尽くされ、破壊されるこのままいけば地球そのものが開発され尽くされ、破壊されるこのままいけば地球そのものが開発され尽くされ、破壊されるに至るだろう。動物も植物も根絶やしにされ、「食うものは食われにである。それこそがもっとも普遍的な価値尺度とならなけれなのである。それこそがもっとも普遍的な価値尺度とならなけれるのである。それこそがもっとも普遍的な価値尺度とならなけれるのである。



山折 哲雄

やまおりてつお 1931年岩手県出身。東北大学卒業。主著に『「ひとり」 の哲学』(新潮社)、『危機と日本人』(日本経済新聞出版)、『近代日本人の宗教意識』(岩波書店)、『生老病死』 (KADOKAWA)。京都伝統文化の森推進協議会相談役 (初代会長)。

張しようではないか。勇気を持て!

世界の土俵は一つ、しかし議論する尺度は多様、と胸を張って主